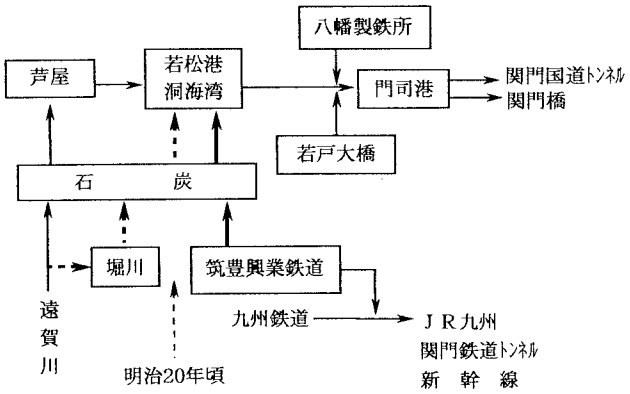
洞海若松築港の創生期に関する史的研究

九州共立大学　正○田中邦博　香月隆志
九州共立大学名誉教授　正　長弘雄次
九州共立大学　学　野田知子　野崎健一

1．まえがき

北九州市の開発・近代化の歩みは、1.近代以前→2.近代土木萌芽期→3.骨格形成期→4.都市空間形成期→5.軍事整備期→6.復興期→7.新都市圏形成期→8.国土軸参画期→9.都市像変貌期に時代規定され、そのキーワードは筑豊の石炭と八幡製鐵所の鐵であると言われている。明治20年以降の筑豊炭田開発の本格化は、輸送機関としての筑豊興業鉄道の開通、積出港としての若松港（洞海湾）の開発、八幡製鐵所の誘致をもたらした。本研究は、北九州市、日本経済の近代化に大きく貢献した若松港や洞海湾の開発について、その創生期に焦点を当て、史的立場から取りまとめたものである。北九州市土木史の創生期の時代規定の内容と対応事業事例を表－1に、その展開図を図－1に示す。



図－1　北九州市土木史の流れ

表－1　時代規定の内容と対応事業事例

時代規定	内　　容	事業事例
1．近代以前	西欧型の土木技術思想が導入される以前、風土固有の土木技術・構造物	堀川運河、（石炭）
2．近代土木萌芽期	江戸末期から明治半ば、鉄道や築港を中心とした西欧技術導入時期の先駆的・試行的技術	港湾（門司港／若松港） 筑豊興業鉄道 九州鉄道
3．骨格形成期	官営製鉄所建設から大正半ば、北九州の固有環境・条件に沿って展開された、主としてインフラ・土地創出事業	洞海湾埋立(製鉄) 電気軌道 （明専）
4．都市空間形成期	大正後期から昭和初期、市民の生活空間の形式に寄与する計画・建設事業	貯水池（大谷／河内／養福寺）、区画整理

※北九州土木史編集部会内部資料を一部改変

2．洞海若松築港創生期の歩み

明治以来日本経済の近代化に大きな役割を果たした筑豊の石炭は、1684年(貞元元)に黒田藩の統制におかれ遠賀川の水運により河口の芦屋を経由して輸送されていたが、1804年(文化元)遠賀川と洞海湾を結ぶ堀川運河完成後は、その積出港が芦屋から若松に変更され、洞海湾の開発と若松港の近代化の基礎となった。

明治に入ると、新政府により鉱山解放、鉱区の出願が自由となり、1887年(明治20)以降大手資本の参入により生産規模が拡大して、川ひらたによる水運が限界となり、鉄道の敷設、積出港としての若松港、洞海湾の開発が焦眉の急となった。

北九州地区で九州鉄道に次いで二番目に敷設された私設の筑豊興業鉄道は、1889年(明治22) に筑豊炭田の石炭を若松港に輸送するために設立され、これによって筑豊の石炭の輸送力は大幅に強化され、積出港・集積地としての若松港、洞海湾の開発に益々拍車がかかった。

その後の若松港、洞海湾の開発促進に伴う石炭輸送力の強化は、若松港と共に門司港の発展が促進され、1897年(明治30)官営八幡製鐵所が誘致されて、工業都市としての北九州市の骨格が形成された。

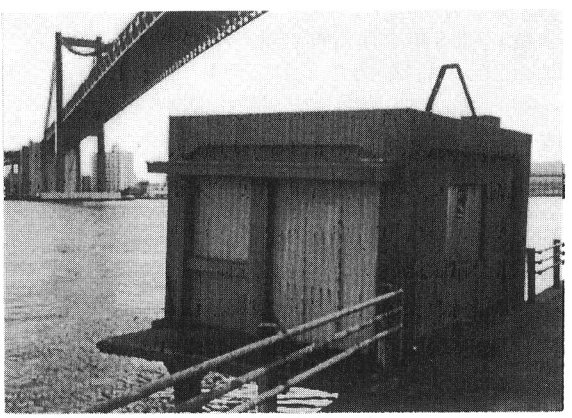
このように若松港を含めた洞海地区の開発が北九州市や日本の近代化に果たした役割は極めて大きなものがあった。洞海若松築港創生期の系譜は表－２の通りである。

表－２　洞海湾若松築港創生期の系譜

1. 若松浚疏会社創立上申		[1888年（明治21）11月]
2. 若松築港会社創立	筑豊興業鉄道の開通	[1891年（明治24）８月]
[1890年（明治23）５月]	若松築港株式会社の創立	[1893年（明治26）７月]
	入港料徴収	[1894年（明治27）１月]
3. 第一、二次拡張工事	国家補助と製鉄所の補助金	[1899年（明治32）12月]
[1899年（明治32）４月]	三者協約と航路標識の設置	[1900年（明治33）11月]
	八幡製鉄所創業開始	[1901年（明治34）２月]
	繋船浮標使用料の徴収	[1905年（明治38）７月]
4. 第三次拡張工事		[1912年（明治45）４月]
5. 第四時拡張工事（洞海湾埋渫工事）	若松港第二種重要港選定	[1921年（大正10）６月]
[1920年（大正９）12月]	戸畑一文字海岸埋築工事	[1922年（大正11）11月]
	港銭争議	[1931年（昭和６）５月]
	市営貨物電車の敷設と岸壁工事	[1934年（昭和９）６月]
6. 中島切取りと製鉄所の洞岡埋立	入港銭徴収の廃止	[1948年（昭和23）３月]
[1939年（昭和14）10月]		

３．近代化遺産としての遺構

洞海若松築港開発史における創生期の遺構としては、若築建設本店前に残る港銭収入所廃屋（写真－１）が当時の面影を残す程度である。



写真－１　港銭収入所廃屋

４．まとめ

筑豊の石炭と結びついた若松港・洞海湾の開発・発展史はそのまま北九州市の都市形成史でもある。昭和５０年代から、産業構造や生活様式の変化に伴う再開発・都市機能の見直しが進められ、都市は大きく変貌しようとしている。

ともすれば我々は近代的な技術や新たな開発に目が向きがちである。しかし、近代化を支えた輝かしい歴史的な土木遺産を体系化し、後世に残すことは、新たな環境における開発のあり方や土木技術者として持つべき基本倫理の涵養に必要であろうと考える。

参考文献

1)若築建設株式会社：若築建設100年史，1990.

2)馬場俊介：土木教育における土木史の役割，土木学会第51回年次学術講演会，1996.